

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

## 実施報告書

プログラム名	理論と実践の往還を実感するアクティブ・ラーニング型研修体制の構築
プログラムの特徴	<p>本プログラムは、これまでに長野県教育委員会（長野県総合教育センターを含む。以下同じ。）と上越教育大学大学院教育実践高度化専攻（以下「教職大学院」という。）がそれぞれに行ってきた研修を連携して実施するものである。長野県教育委員会が把握する学校現場の実態から導いた喫緊の教育的課題に基づき、長野県教育委員会と教職大学院教員が連携して研修を企画・運営する。教職大学院教員の持つ理論、教職大学院院生（現職院生と学部卒院生による。以下同じ。）チームによる最新の実践成果を統合的に研修する理論編の研修と、学校現場の中で理論編の知見に基づき、教職大学院院生チームが授業などを行う実践編の研修を組み合わせることにより、初任者レベルの教員から中堅教員、ベテラン教員まで幅広い教員にとって、学校現場にすぐに効果的な力を身に付けることのできる研修を実現する。</p> <p>また、研修の成果と課題を長野県教育委員会と教職大学院と共有し、それにより、長野県教育委員会の研修体制を強化するほか、教職大学院は、最新の教育適所問題における学校現場の実態に合わせたカリキュラム改善に役立てる。</p>

平成29年3月

機関名 国立大学法人上越教育大学

連携先 長野県教育委員会

# 理論と実践の往還をめざした アクティブ・ラーニング型研修

長野県総合教育センターでの研修〔理論編〕



4日間、8講座を実施

学校現場での研修〔実践編〕



全21講座、教員657名、児童・生徒1043名が参加

理論と実践の往還

プログラムの全体概要

## I 開発の目的・方法・組織

### 1 開発目的

高度専門職業人としての教員養成システムを構築して運営されている教職大学院は、開設当初から理論と実践の往還を実践することで学び続ける教師を育成している。さらに学部新卒学生の教員への就職率はほぼ 100%であり、若手教員養成のモデルともなっている。しかしながら、教職大学院の定員は、平成 27 年度現在、全国で 800 人程度の養成にすぎず、現職教員全体の資質向上をめざすには定員が少なく、難しいのが現状である。

本大学では、平成 25 年概算事業「教師の専門職化をフォローする研修体制の構築」を平成 25 年度より 3 年間実施してきた。長野県教育委員会、新潟県教育委員会、富山県教育委員会と本大学との連携事業であり、教職員の資質向上を諮るために、自主的・自発的な研修希望に応え、研修の機会及び情報の提供、助言を行い、研修活動を支援してきた。その結果、研修が一方的な教職員への知識伝達に終わらず、研修の後、学校現場に戻ってから研修内容を具体化し、どのように反映したのか、問題は何であったのか等を講師にフィードバックするシステムを考案し実践した。特に長野講座では、平成 26 年度 100 名の受講者から平成 27 年度 230 名の受講者と増加し、教職大学院の理論を学ぶ教職員の需要が少なからず存在することを実証した。しかし、研修内容は理論的な内容が主で、受講者が能動的なアクティブ・ラーニング型の研修を行っているが、実際の授業や学校現場の内情に対応する実践を伴った研修となっているわけではない。

理論と実践の往還による学修の成果は教職大学院で高い評価を得られていることから、この学修を一般の教職員が行う研修を実現できるシステムの構築が必要である。長野県教育委員会と今以上に連携を深め、理論と実践の往還を目指した研修プログラムを開発することを目的とする。

### 2 開発の方法

#### (1) プログラム開発の背景

従来の研修において、受講者である教員は、自らの課題を鑑み、その内容を選択し、研修を受講する。講師は、講義形式で、最新の理論にもとづき研修を行うが、研修内容は、一般化された学校を想定しているため、受講者、それぞれの学校に適合しているわけではない。特に長野県では、山間地小規模校や都市部の学校等その差が激しく、各校の実態が必ずしも一般化された学校と同一とはいいがたい。研修を受けた教師は、自らの学校の実態に合わせて、研修内容を咀嚼する必要があるが、受講者の資質・能力によっては、学校の実態に合わせられるとは限らない。

#### (2) プログラムの概要

本プログラムは、「理論編研修」と「実践編研修」の 2 つの研修からなる。長野県総合教育センターで行う研修を「理論編研修」とし、ここでは、受講者同士で、受講者の学校に研修内容を持ち帰った場合、どのようなことができるのかを話し合う時間を設ける。また、理論編研修を受講した受講者の学校をお借りし、講師が出向き学校現場の中で研修を行う「実践編研修」を行う。

「理論編研修」は、長野県教育委員会が、長野県内の教育事情を鑑み、喫緊する教育的課題を選出する。この教育的課題を解決に導き出せる理論を持ち合わせたアドバイザーを上越教育大学教職大学院が選定し、理論編研修となる講座を長野県教育センターで開催する。また、教職大学

院生が行う実習科目「学校支援プロジェクト」での実践を、アドバイザーの理論と合わせて示すことを目的とする。このことから、上越教育大学の教員の理論を伝える講演と院生による実践例を示すことで、理論と実践の往還をバランス良く研修することができると思う。

「実践編研修」は、受講者の学校現場に、上越教育大学の教員が出向き、理論に基づく研修を学校現場にて行うことを目的としている。「学校支援プロジェクト」で実践を行っている教職大学院生がチームとなり実践し、理論編研修で受講した受講生や開催校の職員はもとより、近隣の諸学校の希望者にも開放する。この長野モデルを全国の同様な教育的課題を持ち合わせた学校現場に適応し研修を行うものである。

### 3 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割
1	長野県総合教育センター・ 所長	三浦 章	教職大学院との連携の担当 (協議会副議長)
2	長野県総合教育センター・ 指導主事	齋藤 俊樹	教職大学院との連携の担当
3	上越教育大学大学院学校教育研究科・ 教授	松沢 要一	開発プログラムの総括担当 (協議会議長)
4	上越教育大学大学院学校教育研究科・ 教授	桐生 徹	開発プログラムの事務担当 長野県教育委員会との連携担当
5	上越教育大学大学院学校教育研究科・ 教授	水落 芳明	研修講座の企画、運営担当
6	上越教育大学大学院学校教育研究科・ 准教授	阿部 隆幸	研修講座の企画、運営担当
7	上越教育大学大学院学校教育研究科・ 准教授	片桐 史裕	研修講座の企画、運営担当

## II 開発の実際とその成果

### 1 理論編講座

#### (1) 研修の背景やねらい

理論編研修は、長野県総合教育センターにおいて実施する研修を指す。主に大学教員が学校関係の教職員へ理論的な背景を含めた研修を実施する。研修項目は、長野県教育委員会が情報収集した喫緊な課題を元としている。その結果、4項目8講座を実施することになった。それぞれの研修の目的などは(4)各研修について、を参照されたい。

#### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

研修項目	対象	参加人数	期間	会場	日程	講師
学級づくりのための講座	小・中・高・特等の教員	30	6月10日	長野県総合教育センター	10:00～12:00	片桐史裕 准教授
		30	6月10日		13:00～15:30	赤坂真二 教授
学校づくりのための講座		14	7月1日		10:00～12:00	桐生 徹 教授
		14	7月1日		13:00～15:30	水落芳明 教授
新しい学習方略に向けた講座		25	9月6日		10:00～12:00	廣瀬裕一 教授
		25	9月6日		13:00～15:30	西川 純 教授
協同を育むための講座		31	9月16日		10:00～12:00	佐藤多佳子 准教授
		31	9月16日		13:00～15:30	阿部隆幸 准教授

#### (3) 各研修について

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
学級づくりのための講座	2	群読という学習活動を体験し、協働で1つの群読作品を作り上げる過程で、人間関係づくりができていくことを体験し、学級づくりに取り入れる方略を習得することを目指す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：「群読で学級づくり」をテーマにして、群読に取り組むことで、協働活動を生み出し、人間関係を構築していく実践を紹介し、群読を体験した。</li> <li>・実施形態：講義と演習</li> <li>・使用教材：自作の群読脚本集</li> <li>・進め方の留意事項：演習では6名程度のグループで群読の脚本づくり、練習、発表をおこない、協働学習の過程で人間関係がどのように変化したかを意識させた。</li> </ul>

	2.5	学級集団づくりにおける実践的課題から自分自身のクラスを振り返り、それを改善するための理論と方法をマネジメントの視点で捉えた教師のリーダーシップのあり方を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：学級集団づくりを学ぶ必要性を伝え、学級集団づくりで見られている実践的な課題を5点指摘した。また、それを克服するためにマネジメントの視点から教師のリーダーシップを考察し、具体的技術とともに伝えると共に、自分自身の学級で適用できることを考えた。</li> <li>・実施形態：講義と演習</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：ペアになって講義内容について考えを述べ合ったり、簡単な演習をしたりした。</li> </ul>
学校づくりのための講座	2	異学年合同授業を取り入れることで、学習者に知識・理解の定着のみならず、社会的、倫理的、汎用能力の育成をめざす。そのための方略を理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：「小小、小中、中高連携の可能性」をテーマにして、小中一貫教育における異学年交流の実態、アクティブ・ラーニングと異学年合同授業の関連を説明した。その上で、具体的な事例を紹介し、協議し合った。</li> <li>・実施形態：講義とグループ協議</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：受講者同士で関わる状況を作り、講座が異学年の学びの場である事を理解させた。</li> </ul>
	2.5	教員1人1人が目標を共有し、責任を分担して協働することの価値について、理論と実践の両面から検討することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：We（目標を共有して協働し成果も共有する関係）を構築することの理論や演習、授業実践や校内研修における実践を紹介した。</li> <li>・実施形態：講義と演習</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：学校生活の具体的な場面を取り上げて、解説する理論について、具体例を基に理解できるよう留意した。また、アクティブ・ラーニングが注目される背景と授業づくりや学校づくりの理論について、関連して考えられるように留意した。</li> </ul>
新しい学習方略に向けた講座	2	18歳選挙権をめぐる政治教育等に関する国の動きや議論を検証しながら、法的観点と教育的観点を踏まえた主権者教育の在り方を、教師の姿勢を中心に考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：「主権者教育と政治教育」をテーマにして、両者の異同を明らかにしながら、小中高等学校を一貫した主権主体（public citizen）育成の教育の在り方を、アクティブ・ラーニングの視点から考える。</li> <li>・実施形態：演習→グループ協議→全体協議→講義</li> <li>・使用教材：教育法規（抄）、新聞記事、教育雑誌記事</li> <li>・進め方の留意事項：演習による個別の学びからグループによる協働の学び等を経て、講義で新たな知見を提示して思考を発展させる。</li> </ul>

	2.5	<p>大学入試改革が2020年度から実施されることで、高校での授業改善も進行され、その中核となるのがアクティブ・ラーニング（AL）である。ALの実践と子どもこれから生きる社会との関連性などを理解する。</p>	<p>内容：「アクティブ・ラーニングとは何か？」をテーマにして、今後の日本社会がきわめて厳しいこと、それに対応するためエリート教育を改革していることを入試問題で説明した。その上で、具体的な合同『学び合い』の事例を紹介し、協議し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実施形態：講義とグループ協議</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：受講者同士で関わる状況を作り、講座が異学年の学びの場である事を理解させた。</li> <li>・その他：特になし</li> </ul>
協同を育むための講座	2	<p>教室という協同の場で仲間とかかわり合いながら文学を読むことの意義を理解し、汎用的な読みの力をつけるための読みの交流の学習課題の在り方について考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：「読みの交流」によって、個々の読みがつくられる過程で読みの方略が共有されることを体験し、学習課題の要件を考える。教師の協同的な教材分析・学習課題づくりの手法で文学教材の学習デザインを行う。</li> <li>・実施形態：講義・グループ協議</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：学習者だけでなく、教師も協同的に指導案づくりを進めることの価値を実感させる。</li> <li>・その他：特になし</li> </ul>
	2.5	<p>学力向上を含めた、学習への取り組みは「個別化」と「協同化」の視点が大切になると考え、どちらかではなくどちらも日常の授業の中でスムーズに取り入れる方法を話し合いで見つける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：「個別と協同の往来に着目した学習デザイン」をテーマにし、自分自身を見つめ、考え、取り組んで行こうとする「個別」の学びと、自分とは異なった考えを持つ友人と共に考え、取り組み、解決していく「協同」の学びを自由に往来できる学習デザインを考えた。</li> <li>・実施形態：講義とグループ協議</li> <li>・使用教材：特になし</li> <li>・進め方の留意事項：相互意見交流できる状態を作った。</li> <li>・その他：特になし</li> </ul>

2 実践編研修

(1) 実施概要

実践編研修は、長野県の学校のみならず、のべ21校で実施し、参加者数は、教員657名、参加した児童生徒数1043名となった。下記表表2-(1)-1が、実践編研修を実施した一覧であり、表2-(1)-2は、その実施した都道府県と学校数を表している。

表2-(1)-1 実践編研修実施校一覧

NO.	県名	学校名	実施日	講師		参加者数	
				教員	院生	教員	児童・生徒
1	新潟県	上越市立春日中学校	6月6日	桐生	2	38	0
2	新潟県	阿賀野市立水原中学校	6月8日	西川	2	11	32
3	長野県	宮田村立宮田中学校	6月8日	西川	2	22	113
4	高知県	四万十町立昭和小学校	6月10,11日	水落	1	60	8
5	新潟県	村上市立村上第一中学校	6月22日	西川	2	17	35
6	新潟県	新潟市立中之口中学校	7月4日	西川	2	25	164
7	長野県	安曇野市立豊科北小学校	7月6日	西川	2	25	83
8	長野県	宮田村立宮田小学校	7月7日	西川	2	20	88
9	神奈川県	横浜市立永田台小学校	7月15日	阿部	0	24	46
10	新潟県	新潟市立阿賀小学校	7月28日	阿部	0	12	0
11	神奈川県	神奈川学園中学校・高等学校	7月30日	片桐	0	27	0
12	新潟県	佐渡市立佐和田中学校	9月7日	原	4	7	81
13	新潟県	佐渡市立佐和田中学校	10月7日	原	3	4	0
14	長野県	飯田市立旭ヶ丘中学校	10月12,13日	赤坂	0	30	35
15	栃木県	栃木県立さくら清修高校	10月12日	西川	1	12	21
16	愛知県	西尾市立平坂中学校	10月13日	水落	2	200	64
17	新潟県	学校法人中越学園 中越高等学校	10月19日	原	4	13	38
18	新潟県	学校法人中越学園 中越高等学校	10月31日	原	3	13	38
19	新潟県	学校法人中越学園 中越高等学校	11月22日	原	4	13	38
20	静岡県	静岡市立大里西小学校	11月14日	水落	3	31	91
21	青森県	八戸市立長者中学校	12月1日	西川	2	12	100
				合計	41	616	1075

表2-(1)-2 参加した学校所在地

	述べ参加学校数	対象の都道府県
1	10校	新潟県
2	4校	長野県
3	2校	神奈川県
4	1校	高知県, 愛知県, 青森県, 静岡県, 栃木県
計	21校	



## 2-(2)-1 アクティブ・ラーニングに最適な授業研究会【上越市立春日中学校】

### (1) 研修の背景やねらい

異学年合同授業においては、アクティブ・ラーニングの実践を行いやすい、それは、アクティブ・ラーニングは、従来の授業でめざした教養、知識だけではなく「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっているためである。そこで、異学年合同授業にもアクティブ・ラーニングの授業にも生かすことができる、学び合うこどもの授業内の様子を参観し、子どもの学びのストーリーを把握するための方略について、演習と体験を通して理解することをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象、人数、期間、会場：中学校の教職員，38名，6月6日，上越市立春日中学校

② 日程：15:40～16:00 アクティブ・ラーニングと授業研究について説明

16:00～16:30 演習：子どもの学びのストーリーを読み解く授業方略の演習

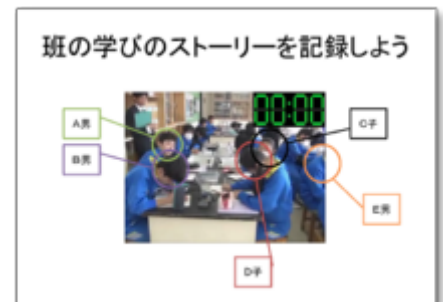
③ 講師：桐生 徹，田村領太（M2），佐々木郁（M2）

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

理論編講座を受講している教師は研究主任だけであったことから、まず、体験する演習の理論的な部分を簡略化して伝えた。その後、実際の授業の様子を15分間視聴した後、2色付箋紙と時系列拡大模造紙を用いて、授業検討会を実施した。

### (4) 研修について

演習では、実際の授業風景を右図のように固定したカメラで15分間映像を流した。その間、受講者は、気になったり、感心したりした部分を右のカウントしているタイマの数字と共に記録していった。15分経過後、2色付箋紙にメモをした内容の中で、他の方と情報を共有した方がよいと思われるメモ内容を選択し、付箋紙に単文で記入した。赤の付箋紙には、教師や教材、教室環境等の気づきを記入し、黄色の付箋紙には、子どもの学びでの気づきを記入した。



4, 5人班で時間を記入した拡大模造紙を取り囲み、自ら記入した付箋紙を時間軸に沿って貼りながら説明を話した。似ている内容や部分に関しては、付箋紙を続けて貼り、その部分について話し合いを行った。

### (5) 受講者の感想など

- ・これまでは、授業案や教師、教材で授業を見がちだったが、生徒の姿で授業を語るという新しい視点をいただいた。
- ・付箋紙により、授業の様子が視覚化でき、どこが山場なのかがよくわかった。
- ・何もやっていないように見える生徒でも、観察することにより、見えてくるものがあった。

### (6) 今後の展開

本実践編講座をきっかけにして、会場校では、各教科でこの授業検討会を実践している。授業における教師の授業観察力を高めていくことが可能となっていくと考える。

## 2-(2)-2 中学数学『学び合い』の授業実践と課題づくりワークショップ【阿賀野市立水原中学校】

### (1) 研修の背景やねらい

阿賀野市立水原中学校数学科では、子ども達が主体的に学んだり関わり合って学んだりする授業づくりを課題としている。そこで『学び合い』の授業の実践を2時間行い、子ども達の変容を教職員が参観し協議をすることを通して、学修者が能動的に学修し、汎用的能力の育成を図るアクティブ・ラーニングの授業の在り方について考えを深めることをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

- ① 対象、人数、期間、会場：中学校3年生32名及び水原中学校教職員11名、6月8日、阿賀野市立水原中学校
- ② 日程：11：45～12：35 数学「式と計算」の飛び込み授業  
13：40～14：30 数学「平方根」の飛び込み授業  
15：20～16：50 協議会及び課題づくりワークショップ
- ③ 講師：福田 健（M2）、橋本和幸（M2）

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

授業を参観し、『学び合い』の理論を学び質疑応答することで、授業場面から想起しやすいと考えた。また、参観職員が担当する教科で目標と評価の一体化を意識した課題を作成するワークショップを配置することで、参観職員の今後の実践につながると考えた。

### (4) 研修について

実践授業では、1時間目は子ども達がゴールをイメージしやすい、教職員も取り入れやすいと考え、復習問題のプリントを教科担任に用意してもらった。2時間目は実際の授業進度に合わせて「平方根」の単元での授業を実践した。

授業後の協議会では、『学び合い』の理論の紹介や質疑応答を実施。実践者の長期に渡る実践の成果も含めて紹介した。その後課題づくりワークショップを実施。参観された職員の担当教科の教科書を持ち寄り、各々が今後予定している授業の課題を作成した。その際右図の課題で『学び合い』による課題づくりを体験してもらった。

ここにいる全員が、次のことができる。

- ①ゴールと評価を意識した課題を1時間分作成する。
- ②作った課題を3人に見てもらいアドバイスをもらう。
- ③アドバイスをもとに、改良する。

### (5) 受講者の感想など

- ・生徒の自発的な行動を待つ必要があること、ゴールと評価を考えて授業をつくりそれを生徒と共有する必要があることを学んだ。
- ・ゴールを明確にして授業を考えることで、課題や生徒にさせたい活動が見えてくる。
- ・学習意欲の喚起や学習だけでなく、生徒同士のつながりにも影響を与えられると思った。

### (6) 今後の展開

本講座を参考にしながら授業実践する職員が増加しており、8月には『学び合い』の校内研修を実施したと連絡を受けている。今後も実践し続ける職員がいることが期待できる。

## 2-(2)-3 中学校における異学年合同授業【宮田村立宮田中学校】

### (1) 研修の背景やねらい

アクティブ・ラーニングは、従来の授業でめざした教養、知識だけではなく「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。このことから、異学年合同授業はアクティブ・ラーニングの実践をしやすいと言える。今回は、アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業を異学年合同で行い、生徒が授業を体験し、教員が授業を参観して今後求められる「認知的、倫理的、社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

- ① 対象、人数、期間、会場： 中学1・2・3年生（113人）、教職員（22人）、6月8日（水）、  
宮田村立宮田中学校
- ② 日程：2限目 9：55～10：45 異学年合同授業1時間目 1年数学 2年英語 3年社会  
3限目 10：55～11：45 異学年合同授業2時間目 1年国語 2年理科 3年英語  
4限目 協議会
- ③ 講師：西川純 佐々木譲 藤田純祈

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を実践するために、まず2時間、『学び合い』授業の経験のない子どもたちに出前授業を実施し、主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。授業の開始時に、この授業をなぜやるのか、どのようにしてやるのかといった説明を生徒に合わせて行った。部活動や学校の職員室を例として、異年齢での交流の重要性を実感してもらった。その後、協議会では、質疑応答や、理論的なことを伝えた。

### (4) 研修について

授業の進め方としては、教師が教えることを主とするのではなく、周りの友人達と協働して課題解決を図ること、1年生から3年生まで全員が授業課題を解決することを伝えた。また、授業後には参観した教職員向けに異学年合同授業、アクティブ・ラーニングに関する質疑応答を行った。

### (5) 受講者の感想など

- ・（生徒）普段、下級生と勉強することはないので新鮮だった。部活の後輩に頼られたのが、嬉しかった。
- ・（教師）異学年合同授業を初めて見たが、とても良かった。これからの社会は、学力ももちろん大事だが人間関係形成能力が非常に大事になると感じている。そんな中で、一つのスタイルとして、異学年合同授業のアクティブ・ラーニングを積極的に取り組んでいきたいと強く思った。

### (6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の研修をきっかけに、会場校では、少しずつ異学年合同授業や単学級でのアクティブ・ラーニングにも積極的に励んでいきたいと校長先生よりお言葉としていただいた。

## 2-(2)-4 「目標と学習と評価の一体化」を目指した学び合い授業の理論と実践【四万十町立昭和小学校】

### (1) 研修の背景やねらい

近年、汎用的能力の育成を目指してアクティブ・ラーニングが注目されている。アクティブ・ラーニングに関連して、水落教授は、教師による一方的な教示を控え、学習者の自由なコミュニケーションを軸とした「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインを提案している。研修会では、その考え方にに基づき、異学年合同授業の参観、出前授業、講演を通して、受講する教師の力量向上を図ることをねらいとする。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

#### ① 対象、人数、期間、会場：

1 日目…小中学校の教職員 20 名、6 月 10 日、高知県四万十町立四万十小学校

2 日目…小中学校の教職員 40 名、6 月 11 日、こうち男女共同参画センター「ソーレ」

#### ② 日程：

1 日目…3 時間目 院生による小学校 3・4 年複式学級での出前授業

4 時間目 異学年合同授業の参観

5 時間目 院生による小学校 3・4 年複式学級での出前授業

6 時間目 水落教授による講演

2 日目…9:00～12:00 水落教授による講演、院生による発表、質疑応答

#### ③ 講師：水落 芳明

### (3) 研修項目の配置の考え方

研修に参加した教師が「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインについて、理論面と実践面の両面から体感し、理解できるように研修項目を配置した。

### (4) 研修について

前述した研修項目の配置に基づき、院生による出前授業と異学年合同授業の参観を通して得た成果を、講演の内容に写真やビデオ映像で直接盛り込む形でフィードバックすることで、受講者の理解を深化できるようにした。さらに 2 日目の講演では、さらに内容を高度化させ、「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインについて学術的な研究成果を引用して講演を行った。

### (5) 受講者の感想など

・四万十町には小規模校が多く点在しているが、その状況を逆に生かして異学年合同の学び合い授業を行っていた。実際の授業の様子を参観して、ぜひ実践してみたいと感じた。

・アクティブ・ラーニングという言葉や内容は聞いていたが、水落先生の講演を聞いて、目標と学習と評価を一体化させることが子どもたちの主体的な学び合いに重要だと分かった。

・水落研究室の院生の授業を参観して、目標を子どもと共有し、子どもたちが全員で目標達成を目指して頑張っている姿に感心した。

### (6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

本研修では出前授業による実践面の内容と講演の理論面の内容をリンクさせて行った結果、受講者から良い評価をいただいた。このような研修会を通して教師力を育成していくためには理論と実践の両方を取り込んだ内容構成にすることが重要であることを実感した。

## 2-(2)-5 『学び合い』の授業実践と課題づくりワークショップ【村上市立村上第一中学校】

### (1) 研修の背景やねらい

当初は村上第一中学校の数学科のみで『学び合い』によるアクティブ・ラーニングの飛び込み授業を実践する予定であったが、村上市の中学校数学科教員で構成されている数学教育研究会の希望もあり公開授業となった。そこで、『学び合い』の授業実践を2時間行い、子ども達の変容を教職員が参観し協議をすることを通して、学修者が能動的に学修し、汎用的能力の育成を図るアクティブ・ラーニングの授業の在り方について考えを深めることをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

- ① 対象、人数、期間、会場：中学校3年生及び村上市・胎内市の中学数学教員，  
中学生 35名 指導主事・教員 17名 上教大教職大学院生 5名，  
6月22日，村上市立村上第一中学校
- ② 日程：13：35～14：23 数学「平方根」の飛び込み授業  
14：33～15：21 数学「平方根」の飛び込み授業  
15：50～16：40 協議会及び課題づくりワークショップ
- ③ 講師：福田 健 (M2)，橋本和幸 (M2)

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

授業を参観し、その後『学び合い』の理論を学び質疑応答することで、授業場面から想起しやすいと考えた。また、学年毎に分かれて、目標と評価の一体化を意識した課題を作成するワークショップを配置することで、参観職員の授業実践につながると考えた。

### (4) 研修について

実践授業では、1時間目は子ども達がゴールをイメージしやすい、教職員も取り入れやすいと考え、復習問題のプリントを教科担任に用意してもらった。2時間目は実際の授業進度に合わせて「平方根」の単元での授業を実践した。

授業後の協議会では、『学び合い』の理論の紹介や質疑応答を実施。その後課題づくりワークショップを実施。学年毎に今後予定している授業範囲の授業場面を設定し、課題を作成した。その際右図の課題で『学び合い』による課題づくりを体験してもらった。

ここにいる全員が、次のことができる。

- ①ゴールと評価を意識した課題を1時間分作成する。
- ②作った課題を3人に見てもらいアドバイスをもらう。
- ③アドバイスをもとに、改良する。

### (5) 受講者の感想など

- ・評価ポイントを明確にした課題設定の大切さを授業に生かしたい。
- ・可視化のポイントが少しわかったので、生徒への声かけを大事にしたい。
- ・1つの題材に対して、様々な先生方が意見を出し合うことで1人では考えられないような指導法が学べた。

### (6) 今後の展開

本実践講座を参考にして授業実践したかを調査し、アクティブ・ラーニング実践前に教師の感じる疑問や実践するに至った動機等分析し、飛び込み授業と協議会の持ち方を改善する。

## 2-(2)-6 中学校における異学年合同授業【新潟市立中之口中学校】

### (1) 研修の背景やねらい

異学年合同授業においては、アクティブ・ラーニングの実践を行いやすい。それは、アクティブ・ラーニングは、従来の授業でめざした教養、知識だけではなく「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっているためである。今回は、異学年での協同学習をベースに中学1～3年生を対象にアクティブ・ラーニングを行い、生徒が授業を体験し、教員が授業を参観して今後求められる「認知的、倫理的、社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象、人数、期間、会場： 中学1・2・3年生（164人）、教職員（25人）、7月4日（月）、新潟市立中之口中学校

② 日程：3限目 10：45～11：35 講演（内容：今後の入試改革の動向 少子高齢化との関連について）

4限目 11：45～12：35 異学年合同授業1時間目

5限目 13：40～14：30 異学年合同授業2時間目

③ 講師：西川純 佐々木謙 藤田純祈

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

まず、講演会にて今後の入試改革、ひいては現代社会がどのように変わっていくのかといった内容を生徒・教職員に伝えた。そして授業で5分間この授業をなぜやるのか、どのようにしてやるのかといった説明を生徒に合わせて行った。「今後社会に出ていく際に必要なのは、他者と折り合いをつけ協働し課題や問題を解決していく力であり、その練習を学校の教科学習を通して行う。また、異年齢の人たちと働いていくことが当たり前の社会では、今回のような異学年合同授業は非常に意味がある。」ということを伝えた。部活動や実際に学校の職員室はそうした異年齢集団であることを伝え、異年齢での交流の重要性を実感してもらった。

### (4) 研修について

授業の進め方としては、教師が教えることを主とするのではなく、周りの友人達と協働して課題解決を図ること、1年生から3年生まで全員が授業課題を解決することを伝えた。また、授業後には参観した教職員向けに異学年合同授業、アクティブ・ラーニングに関する質疑応答を行った。

### (5) 受講者の感想など

- ・（生徒）普段、上級生と勉強することはあまりないので新鮮だった。困った時に周りの人たちが助けてくれて嬉しかった。
- ・（教師）これからの社会は、学力ももちろん大事だが人間関係形成能力が非常に大事になると感じている。そんな中でこうした異学年合同授業やアクティブ・ラーニングに積極的に取り組んでいきたいと強く思った。

### (6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の研修をきっかけに、会場校では、少しずつ異学年合同授業や単学級でのアクティブ・ラーニングにも積極的に励んでいきたいと校長先生よりお言葉としていただいた。

## 2-(2)-7 小学校異学年合同によるアクティブラーニング出前授業【安曇野市立豊科北小学校】

### (1) 研修の背景やねらい

次期指導要領改訂の注目すべきキーワードが「アクティブ・ラーニング」である。アクティブ・ラーニングは、教員の一方的な講義形式の授業ではなく、課題の発見と解決にむけて主体的・協働的に学ぶスタイルであり、「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。そこで、アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業において、子どもが主体的・協働的に学習する姿を参観することを通して、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善のきっかけにすることをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象、人数、期間、会場：小学校2・4・5年生（83名）、教職員（25名）

7月6日、安曇野市立豊科北小学校

② 日程：11：40～12：25 4時間目（授業第1時）異学年算数

14：05～14：50 5時間目（授業第2時）異学年算数

15：30～16：40 講演 「『学び合い』は簡単だ！」

16：40～16：50 質問等

③ 講師：西川純、福田健、橋本和幸

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を見たことがある教師が多いため、まず2時間、子どもたちが、主体的・協働的に学習するようになる変化を見てもらうために現職院生が授業を実施した。その後、講演では、授業中の教師の働きかけと、それに対する子どもの変化のビデオをもとに伝えた。

### (4) 研修について

講演後はビデオの授業についてや今日参観した授業についての質疑応答を行った。質疑では「終わった子に教えるんだよとあるが、教えるスキルは何か伝えているのか。」「1年生においてノートにどう書くかを指導するのか。」「達成していない子がいるが、次時はどうするのか。そのまま進むのか。」「思考力はどうそだてるのか。」ということが挙げられた。

### (5) 受講者の感想など

- ・教師の声かけ1つで、子どもが関わり始める姿はとてもびっくりしました。
- ・小学校には、授業が分からずに妨害する子、発達障害があり友だちと関係を作りにくい子がいるなか、『学び合い』はその両方をクリアできる授業だと思いました。
- ・勉強を通して、友だちとの関係づくりができるのは一石二鳥だと感じました。

### (6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

実際に自分たちがよく知っている子どもたちが変わっていく様子を見たことや、具体的な授業の始め方、授業中のポイントを知ったことで、授業改善のきっかけになったと考えられる。書籍を購入した教師が多かったことから、アクティブ・ラーニングを自分のクラスで積極的に取り入れようとしている。授業のことで相談し合ったり、合同で授業したりすることで、教師同士の協働力を高めていくことが可能となっていくと考える。

## 2-(2)-8 小学校異学年合同によるアクティブラーニング出前授業【宮田村立宮田小学校】

### (1) 研修の背景やねらい

次期指導要領改訂の注目すべきキーワードが「アクティブ・ラーニング」である。アクティブ・ラーニングは、教員の一方的な講義形式の授業ではなく、課題の発見と解決にむけて主体的・協働的に学ぶスタイルであり、「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。そこで、アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業において、子どもが主体的・協働的に学習する姿を参観することを通して、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善のきっかけにすることをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象、人数、期間、会場：小学校2・3・4年生（88名）、教職員（20名）

7月7日、宮田村立宮田小学校

② 日程：13：45～14：30 4時間目（授業第1時）異学年算数

14：40～15：25 5時間目（授業第2時）異学年国語・特別活動

16：05～17：05 協議会・課題づくりワークショップ

③ 講師：西川純、福田健、橋本和幸

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を実践するために、まず2時間、『学び合い』授業の経験のない子どもたちに出前授業を実施し、主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。その後、協議会では、理論的なことを伝え、実際に授業で使うための課題づくりについてのワークショップを実施した。

### (4) 研修について

協議会では、アクティブ・ラーニング『学び合い』について、最初に子どもたちに語り、授業中教師が語り、終わりに子どもたちに語り、よくある疑問や質問についてのプレゼンテーションを行った。その後、「すぐ使ってみたいと思えるようなゴールと評価を意識した課題を1つ作ってみよう」というテーマでワークショップを実施した。ワークショップでは、授業を実施したい単元や教材を選び、その1時間で身に付けさせてい力（ゴール）とその評価方法を学年ごとに考えた。

### (5) 受講者の感想など

- ・待ち時間を持てあましている子ども達をどうしたらいいか、声かけの仕方、担任の目を向けるべき子ども（②：6：2）などが分かった。
- ・1年生が『学び合い』をするための具体的な方法がイメージできました。
- ・課題の作り方のヒントを教えていただいたので、チャレンジしてみたいと思います。
- ・教師の役割の中で、矢継早に子どもの反応を見つけ、つないでいくことが重要だと感じた。

### (6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の出前授業・研修会をきっかけにして、会場校では『学び合い』を研究テーマに据え日々授業を実践している。異学年で授業をすることや、学年をこえて課題づくりをすることで、職員間の協働力を高めていくことが可能になっていくと考える。



## 2-(2)-9 『学び合う』関係性を促す授業並びに授業研究会【横浜市立永田台小学校】

### (1) 研修の背景やねらい

教師の「一人残らず、わかるように授業を進めよう」という意気込みが、実は学習者の「学びにくさ」の要因になっているときがある。一人一人の理解の仕方は多様であるという立場に立てば、教師がよいと考える教え方がある学習者にはわかりやすいがある学習者にはわかりにくいという状態が考えられる。理解の多様性についてと多様性を理解した上での授業のあり方を考えることをねらいとした。

### (2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

#### ① 対象、人数、期間、会場：

教職員 24 名、小学 3 年生 22 名、小学 5 年生 24 名、7 月 15 日、横浜市立永田台小学校

#### ② 日程：11:30～12:15 小学 3 年生へ授業：算数「大きい数の計算」

13:50～14:35 小学 5 年生へ授業：算数「小数のかけ算を考えよう」

14:50～16:10 演習：『学び合う』完成生を促す授業について話し合う。

#### ③ 講師：阿部 隆幸

### (3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学習者の多様性を前提にした授業のあり方が想像できないという教職員が多数だったために、小学 3 年と 5 年生で授業を行い、その授業を見た後に教職員で多様性を認める授業のあり方を話し合う授業研究会を行った。



### (4) 研修について

演習では、参加者同士ホワイトボードで書き出せるシートに、実際の授業を見て感じたこと、考えたことを書き出しながら話を深めるという「ワールドカフェ」スタイルで互いの考えを交流し、実践につなげる試みをした。



### (5) 受講者の感想など

・「一斉授業は教えた気になってしまう。学び合いは理解してる子と理解していない子の差がハッキリでる」との回答に、今まで沢山授業の準備をして、一斉で教えて教えた気になっていた自分がそこにいたことに気づきました。

・阿部先生は授業の中で『「教えてー」っていいね。「ありがとう」この言葉すてきた』と子ども達の関わる姿をたくさん価値付けなさっていました。そして、学び合いの楽しさを伝え、時間の管理をする、まさにコーディネーターというか、整理する人でした。

### (6) 今後の教師力に向けた可能性

本実践編講座をきっかけにして、会場校では、今まで以上に積極的に学習者中心の授業に取り組みその様子を外部に公開していく（次回は 9 月 6 日）という。今回の学びを学校全体でつなげていくという姿勢はよりよい将来を予見できる。